

## 司馬遼太郎『霸王の家』とその依拠史料

太田満明

はじめに

忍者小説等を書いていた作家活動の初期に、従前の歴史・時代小説のスタイルを踏襲していたが、『竜馬がゆく』の執筆にとりかかった昭和三十七年頃から、司馬は数多くの史料にあたり、しかもその検証に力を加えはじめる。やがて、昭和四十三年から書き始めた『坂の上の雲』で、司馬本人の所謂「小説とは本来フィクション」なのだが「フィクションをいっさい禁じて書く」<sup>①</sup>と、ころにまで高めていったところで、概ね司馬の評価は定まったようである。昭和四十七年からの『翔ぶが如く』やその後の『空海の風景』（昭和四十八年一月〜同五十年九月）などは、その評価にこたえたといつてよいだろう。ここに、吉川英治、山岡荘八らに代表される、事実よりも歴史上の人物に自身の心情を仮託することが多かった前時代の歴史小説を変革したという世評の基本線が生まれ、司馬作品に歴史書に近い評価が与えられるに至ったのである。

しかし、司馬の史料への臨み方は、読者が考えているほどに歴史学の本文批判的（この学問でいう実証的と同義語）水準にまで達しているのだろうか。

本稿では、今日の司馬評価を決定したと思われる『坂の上の雲』後半部と同時期に書かれた『霸王の家』（昭和四十五年一月〜同四十六年九月）における依拠資料の分析と、その本文批判の水準を問題にしてみたい。さらに、『霸王の家』の主人公・家康に対する司馬評価の淵源に触れてみようと思う。

### 一、依拠史料の分析

司馬の作家活動の履歴において、『坂の上の雲』『霸王の家』以降のものは、史料を数多く渉猟し、しかも事実関係の正確さを探求することに意を用いはじめた時期の作品というふうに分別できる。

それを証するかのように、この『霸王の家』で司馬が挙げた史

料名は三十八種類にのぼる。ちなみに、『竜馬がゆく』と同時期に書かれた『国盗り物語』（昭和三十八年八月〜同四十一年六月）の織田信長編は『霸王の家』のおよそ倍の分量があるが、挙げられた史料名を同じように調べてみると、わずかに六種類にすぎない（『国盗り物語』斎藤道三編は伝奇小説の要素が非常に濃厚であり、ここでは比較の対象としなかった）。すなわち『祖父物語』『山澄本・桶狭間合戦記』『東照軍鑑』『信長公記』『春日局譜』そして『ルイス・フロイスらポルトガル宣教師の書簡』である。史料名を挙げずに引用しているものも『霸王の家』に比べればよほど少ない。この数字の変化は、なによりも前述したような司馬の作家としての姿勢の変化によるものととらえるのが妥当かと思える。つまり、伝奇性の作風から脱し、より多くの史料にあたり、人物の履歴や当時の社会の実相を調査する密度を高めたことの自負のあらわれであろうか。

『霸王の家』にもられた逸話とその出典の史料名を列挙する。同時に、司馬がその史料について評した言葉があれば要約し、※の記号以下で併記した。また、同じ史料から複数回引用している場合は丸数字で示した（なお、資料名の後の◎は当該資料が『徳川実記』に、◇は『日本戦史小牧役』に収載されていることを示す）。

## 『三河物語』

①家康、人質として駿河に出航、が、途中織田家に身柄を奪われる。

②家康の嫡子信康の肯定的評価。

③徳川家宿老の石川数正、今川家より信康母子奪還。

※同史料は、代々主家に忠誠を尽くしてきたにも関わらず、一族が幕府から冷遇された大久保彦左衛門が暗い怒りにまかせて書いたもの。信康の肯定的評価も世を時めく他の譜代衆を誹謗するのが目的か。

## 『甲陽軍鑑』

①姉川の合戦における徳川軍の奮戦、織田軍団の脆弱ぶり。

②三方ヶ原の合戦前の武田方の遠州、三河調査。

※同史料は、武田家の将高坂弾正の著といわれているが、じつは江戸初期、小幡勘兵衛景憲という江戸軍学の祖が高坂弾正の名前の権威をかりて自分で書いたものらしい。

## 『中泉古老物語』◎

家康晩年の言葉……①酒は元気を引き立てるもと。

②侍は、能力があるのよりひたすら実直であるのがよい。

## 『故老談話』

時ならぬ（季節はずれの）桃をくわぬ家康。

『岩淵別集』◎『武功雜記』◎

家康の馬上指揮の様子。

『校合雜記』

三方ヶ原での家康の騎馬での敗走。その飛ぶような速さ。

『三河後風土記』

家康の正妻築山殿と滅敬との密通。

※同史料は、岡崎信康の傳人平岩親吉が著者といわれているが、京の人沢田源内という者が平岩の名をかりて作ったものともいう。いかにも三河というこの国の草いきれとエネルギーを感じさせるところが魅力。土臭い文章。

『改正参河後風土記』

①織田、徳川と北条との同盟の後の武田勝頼の強がり。

②北条軍と同時に武田領を挟撃するため出陣した徳川軍。その撤退後の様子。

③小牧の陣第一戦での徳川家臣団の一部隊奥平勢の様子。

『信長公記』

①高天神落城後の勝頼の行動。

②武田滅亡後、徳川家の接待をうけた信長の言葉やその接待の様子。

『中興源記』◎

家康の言葉……甲州兵がならぶと陣列が剛強にみえる。

『備前老人物語』

信長の言葉……人は心と気をはたらかすをもって善しとす。

『カリーオン神父のローマ法王への報告書』

本能寺の変。堺見物によつてその難をまぬがれた家康。

『小田原記』

北条氏康の人物評。絶賛。

『古老物語』◎

家康の言葉……男子の下帯はもめんの白きより浅黄に染めたるがよし。

『天野逸話』◎『前橋聞書』◎

家康の財政の辛さ。

『駿河土産』◎

①家康の千葉咲評。

②家康の馬術、あぶない所へ来ると、馬から降りて歩く、それが大坪流の秘伝。

③二代將軍秀忠のバカ正直ぶり。

『幕府祚胤伝』

家康の側室の一人西郡局にしむらたのつばねの履歴。

## 『故老諸談』◎◇

本多康重が聴いた家康の言葉……臣は生かしておけば股肱になる。そのために自分は、素知らぬ体を通してきた。

## 『家忠日記増補』

对羽柴秀吉戦を想定した家康と織田信雄の密会。

## 『岩淵夜話』◎

家康の軍法には定まったものがなかった。徳川軍は合戦の都度、臨機応変に対応した。

## 『小牧陣始末記』◇

①家康の言葉……秀吉のやり方ではその天下は末で瓦解する。  
②長久手の役で羽柴軍の森武蔵守長可を討ち取ったのは徳川軍の足軽柏原与兵衛。

## 『伊賀者由来記』

小牧の合戦の時に徳川のために間諜をつとめた伊賀者たち。

## 『長久手御陣覚書』◇

小牧の陣第一戦での徳川家宿老酒井忠次の羽柴軍を嘲った言葉。

## 『形原松平記』◇

小牧の陣第一戦、松平又七郎が討ちとった野呂助左衛門の風

姿。

## 『紀君言行録』◎

小田原の陣での家康の馬術。その余りの慎重さ。

## 『長久手之記』◇

①長久手の戦場の地形。②同役での家康の家臣安藤直次の武功。

## 『柏崎物語』◎◇

同役での森武蔵守長可の銃撃による戦死。

## 『四戦記聞』◇

森武蔵守長可を討ち取ったのは足軽杉山孫六。

## 『大三川志』◇

羽柴軍の池田勝入斎の長久手の役での奮戦。死の直前、短刀を抜き、永井伝八郎の指を切る。

※だが、他の記録とつき合わせて考えると、抜刀しておらず、槍を受け身うごきできぬ様子であった。

## 『烈公聞書』◇

池田勝入斎を討ち取ったのは安藤直次か。実は井伊万千代直政に功を譲ろうとした。

※同史料は成瀬隼人正の弟で成瀬吉右衛門という旗本が安藤直次にじかに書いた聞書。

『藩翰譜』

池田勝入齋を討ち取った徳川軍の永井伝八郎が五千石しか禄していないのを、勝入齋の子輝政が開き、父の首がそれほど賤しいとは、と残念がる。

『改正太平秘記』◇

池田輝政の右の言葉を聞き、家康が永井伝八郎を一躍笠間七万石に。

※ただし、これは事実ではない。七万石になったのは、家康の死後で元和五年。土地も笠間ではなく下総古河。

『山中氏覚書』◇

同盟者の織田信雄に永井伝八郎の加増を勧められたが、家康はその必要はないと答える。

『家忠日記』

①石川数正の出奔が変事として伝わり、その急変時に軍団を編成していく三河武士団。②対秀吉戦のための徳川家の全軍召集。

※同日記は、三河深溝の領主松平家忠の記録で、家忠は筆まめな人。

『道齋聞書』

二代將軍秀忠への家康の言葉……自分の死後も、徳川の天下

は乱れまい。ざっと済みたり。

『国師日記』

死の床の家康の容態の変化。脈、食事等。元和二年二月三日。同四日。同二十二日。翌三月十九日。

以上である。一口に三十八種類というが、それらを全て読み込むには、蒐集の手間とあわせ、かなりの労力を要する。だが、私が調査した限りでは、司馬はそのいちいちに当たったのではなく、もっと簡便な方法を使つて家康史料の整理を行ったものと思われる。なぜなら、先に触れたように、この三十八種類のうち十二種類は『徳川実記』（『新訂増補国史大系』・吉川弘文館）の中の「東照宮御実記」にその出典の史料名とあわせ確認しうるものだからである。史料名を提示していない『霸王の家』中の家康の逸話で、この『徳川実記』に同類のものが掲載されているのは三十以上を数える（私以外の主観による場合、三十を上回る数が予測されるため、このように記しておく）。これを冒頭の「三河かたぎ」の章だけからひろいだしてみても、

・少年の家康すなわち竹千代が遊び相手の鳥居彦右衛門を高殿の縁から突き落とす。『鳥居家譜』

・孕石主人の竹千代への言葉……三河小せがれには、もう飽

き飽きしたわ。『東武談叢』『三河の物語』

・家康の元服後の三河岡崎への一時帰国。『岩淵夜話別集』

・近藤登之助にいたわりの言葉をかける家康。『岩淵夜話別集』

・家老鳥居忠吉の岡崎城での極秘の蓄財、家康にそれを見せる。『鳥居家譜』

と五つを数える。確かに司馬自身が『徳川実記』を参考にしたとは明言してはいないが、かれがこの書物を基本資料として使用した蓋然性は極めて高いものであるといわなければならない。

また、この『霸王の家』は後半が小牧長久手の役の描写で占められていて、史料もそれに関するものばかりが提示されているが、これらについても、参謀本部編『日本戦史小牧役』（明治四十一年十月）の中と同戦役に関する史料を集めた「補伝」を参考にしたのはなかるうか。先に掲出した三十八種類の史料名に◇の記号を付したのがそれで、この戦役に関する提示史料のほとんどが同書に掲載されている。さらに、『徳川実記』同様、作品中に史料名を提示していない逸話で『日本戦史小牧役』に拠っているものが数多くある。これも、小牧長久手の役の冒頭の場面「不覚人」「清洲へ」に限ってひろいだしてみると、

・安土城下での羽柴秀吉と織田信雄の反目。『小牧戦話』

・秀吉と信雄の家老滝川雄利との対面。雄利に自分への内通を勧める秀吉。『藩鑑引見聞書』

・信雄が秀吉に寝返った三人の重臣たちを上意討にかける。

『武功雑記』『池田正印覚書』『常山紀談』

・右の場面での討たれる側の岡田重孝と討ち手土方勘兵衛とのやりとり。『池田正印覚書』『常山紀談』

・織田信長の乳兄弟の池田勝入斎が秀吉に味方した経緯。

『池田家譜集成引長手戦記』『小牧戦話』

・戦役の前に秀吉が諸将に宛てた手紙。

などとなる。したがって、司馬がこの書物を基本資料として使用した蓋然性も極めて高いといわざるをえない。

同様の資料に東京大学史料編纂所編『大日本史料』第十二編之二十四（大正十二年三月）がある。同書の家康の没した日の条には、家康の逸話が網羅されているが、作品中に史料名が提示されているものでは『幕府祚胤伝』や家康が上府に金銀が集まれば下々は金銀を大切に世間に金銀が多くなれば物価が騰貴すると語ったとする『前橋聞書』などが、また、史料名が提示されていないものでは、家康が夏期は麦飯ばかりを食べていた逸話（『正武将感状記』）や天下人になってからも懐紙一枚をすら儉約する逸話（『葉隠聞書』）などが、この資料集の中に載せられている。

このように検証してみると、司馬が『霸王の家』で徳川家康という人物を把握しようとした際、基本資料としたのは、(Ⅰ)『徳川実記』(東照宮御実記)(Ⅱ)参謀本部編『日本戦史小牧役』(Ⅲ)『大日本史料』第十二編之二十四、の三冊であったと思われるのである。また、かりに司馬が既述の三十八種類の史料を全て所有しないしは閲覧していたとしても、右の三冊を索引のように入用していたことは最低限いいうるであろう。なお(Ⅰ)(Ⅲ)については、司馬の没後、蔵書を調査した谷沢永一によって、全巻あるいは既刊分の全巻を司馬が所持していたことが確認されている(2)。また(Ⅱ)についても、司馬の比較的初期の長篇である『風神の門』の「影法師」の章に、

家康はだまっていた。／「古人物語」(旧参謀本部編・日本戦史所載)という江戸初期にかかれた随筆には、家康は意にも介さなかつたという。

の記述がみえる。もっともこの場合の旧参謀本部編『日本戦史』とは『大坂役』であり『小牧役』の方ではないのだが。しかし、この書き方から司馬がはやくから旧参謀本部編『日本戦史』所載の「補伝」史料に眼を通していたことがわかる。

いずれの資料も、家康やその家臣たちに関する逸話を集めた史料集を付していることに特徴がある。こういった書物を基本資料

とするところに、司馬の作品を執筆する際の方法論の一端がうかがえようか。

他に家康ならびに徳川家の動きを年代ごとに追っていった史料としては『三河物語』『改正三河後風土記』、また後に幕藩体制下で譜代、外様大名となった家のこの当時の動きやその家の個人をおさえるために新井白石の『藩翰譜』、家康が従軍した他の戦役に関しては同じ参謀本部編の『日本戦史』の『姉川役』『三方原役』などを適宜参照にしたものと思われる。

## 二、依拠史料の史料批判

続けて、前述した依拠史料を来歴の観点から批判してみる。これによって、司馬の本文批判の水準の一端がうかがえるだろう。

史料には文書、記録、伝記、雑史、雑記、戦記など様々な類別がある。十九世紀前半に批判的歴史学が確立されて以来、当該主義の立場から文書が最も信憑性の高いものとする考え方が一般的である。

その知行の宛行状、安堵状、所領の譲状などの文書が徳川家康に関するものでも出版されている。中村孝也著『徳川家康文書の研究』全三巻全四冊(日本学術振興会 昭和三十三年三月)同三十六年三月)である。桑田忠親の著作にも信長、秀吉のそれに並

んで家康の手紙の研究がある③。他にも学術論文を含めると、その文献は数が膨大なものになる。研究史もここ近年に限ったものではない。だが、それらと『霸王の家』を比較して直ちに理解されるの、司馬が年代的に右のものを参考にすることができたにも関わらず、それらの家康文書を自作にほとんど採り入れていないことである（中村孝也の他の著作は、かなり参考にした形跡があるが）。武田信玄の上洛を防ぐため、家康が上杉謙信と攻守同盟を結んだ書信などわずかには引用している程度である。

それでは、他の史料はどうか。文書に次いで信憑性が高いとされる記録としての日記、報告書や、やや信憑性が疑われる伝記、雑史、戦記などである。それらの来歴批判には、事件の当時（もしくは近い年代）に、当地（もしくは近い地域）で、当事者（もしくはそれに近い者）が、真実を伝えることのできる関係、状況下で記述したかという当該主義が主な物差しとなってくる。

この条件からは、『霸王の家』に引用された三十八種類の史料の中で、信憑性が高いと評しうるのは『家忠日記』『国師日記』の二種であろうか。また、編纂物ではあるが原史料という点である程度の価値を有するのは『三河物語』『信長公記』の二種である。ただし、この四種も同列には論じられない。記録として最も信頼性が高いと思われるのが『家忠日記』である。家康に仕えた

深溝松平家の主殿助家忠の、主観的判断をほとんど加えない姿勢で記述された日記である。家康が天下を取る以前に終わっていることもあり、徳川家への礼讃もほとんど見受けられない。逆にそれらを割り引いて読まなければならないのが、金地院崇伝の『国師日記』といえよう。

雑史『三河物語』は書き手大久保彦左衛門の年齢が家康よりかなり若く、内容的にも「文芸性あるいは軍記物語的性格として指摘されるような創作部分の存在は見逃せず」④、また、徳川家美化のための潤色の部分も数多い。さらに、司馬のいう、代々主家に忠誠を尽くしてきたにも関わらず、一族が幕府から冷遇された作者彦左衛門が暗い怒りにまかせて書いたものという文献としての性格も無視できない。なお、司馬がこの史料の作者の情念は分析しているものの、文芸性、軍記物性について原典批判を行っていないのは、注目してよい。もう一つの伝記『信長公記』は、作者が信長の側近太田牛一であることは最適なのだが、『家忠日記』とは異なり記述がその都度のもではなく、後年の慶長年間にとまどめられたものとみえ、部分的な誤謬や事件の起こった年次についての錯綜がかなり見受けられる⑤。しかしそれらの欠点を割り引いても『三河物語』『信長公記』が、ある程度の価値を有するものと見なされているのは、逆にいえば、この戦国時代のも



ので信頼できる史料がいかに僅少であるかということである。司馬が、文書の引用は行わないにしても、これらの史料を用いて、さらには『三河物語』などには原典批判を加えつつ、筆をすすめている部分に関しては、ある程度のレベルに達した書き込みといえるのではなからうか。

他に、『霸王の家』の引用史料で、右の当該条件をある程度満たすということだけでみてみれば『道斎聞書』がある。これは、徳川秀忠の近臣井上正就が駿府城におもむき、そこで隠居していた時期の家康の訓話や、その他の軍記・雑記などを記したものである。成立年代も近世初頭である。また『形原松平記』は、家康の数代前の松平信光の代からの支流形原松平氏の覚書で、この形原氏の戦功などを伝えたものである。成立年代は、この覚書が中心人物として語る松平家信の死の三年後であり、作者もその家信の家臣であるところから、比較的良質の史料と思われる。ただし、戦役の記述の通弊である自家の戦功の過大評価に関しては、これを免れえているかどうかはわからない。『武功雑記』についても、成立が元禄九年であるから、かなり後の時代のものだが、作者の松浦鎮信の平戸藩は関ヶ原の役、大坂の陣の生き残りの牢人らを多数召し抱えたといわれ、前後錯雑などの混乱、雑記としての性質などを割り引いても、かなりの信憑性を持った史料と考えられ

ている。だが、問題なのは、司馬の作品への引用がこれらの史料だけではないという点である。

つまり、右の七種の史料以外の戦記、雑記、雑史を中心とした『霸王の家』の引用史料をどう考えればよいか、というのが次の問題となってくる。司馬が『徳川実記』から引用している（と思われる）逸話集の『故老諸談』や家康一代の略伝『中泉古老物語』、編年体形式で家康の事跡を記した『岩淵夜話』『岩淵別集』、家康晩年の言行録を集めた『駿河土産』などである。

これらは右の条件に関して違いがあるが、総体的史料価値はそれほど高いものとは思われない。『故老諸談』は成立年代が近世初期と特定できるが作者は不詳である（この史料に関しては、司馬が自作の展開にふさわしいものだけを選択していることは前節で述べた）。また『中泉古老物語』の作者山下玄和や『岩淵夜話』『岩淵別集』『駿河土産』の作者大道寺友山は、卒年が江戸中期であり、家康と同時代の者ではない。友山の祖父は徳川秀忠の小姓であったらしいが、それだけではその著述内容の全ての明証にはつながらない。友山の著作には『当代記』など正確な史料と同一の記事内容もあり、全く信頼がおけぬというわけでもないが、右の伝聞の経緯ではフィルターが二重三重であり、他の史料との整合性の確かめようのない逸話等の信憑性が、疑われてもやむを

得ないのである。つまり、これらは末書ともいえないが、史料価値を高いものと断定しがたい史料群なのである。

司馬はこれらの史料に右のような来歴批判を加えていない。それよりも、他の史料にはみえぬ家康の人間臭を嗅ぎとり、それを主眼として自作に採り入れていったものと思われる。これらの史料に対する司馬の姿勢は、小説家の価値基準によるものといつてよいだろう。

次いで、『徳川実記』『東照宮御実記』に載せられたもの以外についても検証してみる。その中で、最も問題となるのが、編年体史料である『改正三河後風土記』であろうかと思われる。この史料からは、とりわけ築山殿事件といわれる天正九年に起こった家康の家庭の惨劇等についての引用が顕著である。

だが、それよりさらに司馬が、『改正三河後風土記』とともに『三河後風土記』という史料名を作品に掲示していることから問題にしなければならない。なにより、その築山殿事件の引用史料名は『三河後風土記』となっているからである。徳川家創業の忠臣で、家康の嫡男信康の傳平岩親吉が『三河後風土記』の作者であるという伝説が古来あったが、それは江戸後期に既に覆されていた。『三河後風土記』を『改正三河後風土記』に書き改め『徳川実記』の編纂にも主筆として関与した成島司直が記述内容を検

証した結果である。『国史大辞典』第十三卷（吉川弘文館、平成四年四月）の「新行紀一の同項の記述も、『江戸幕府編纂物解説編』（雄松堂出版、昭和五十八年十二月）を著した福井保も、これと同意見である。それゆえ、司馬の『三河後風土記』に対する原典批判である「この著者は家康の譜代で、信康の傳人（養育官）である平岩親吉である、ともいわれるが、京の人沢田源内という者が平岩親吉の名をかりて作ったものかもしれない」は、史学的水準をある程度は満たすものといえるのである。「いかにも三河というこの国の草いきれとエネルギーを感じさせるところに魅力がある」「土臭い文章」というのも、内容を読んでみれば大いに首肯しうるところである。

だが問題は、司馬が『三河後風土記』と『改正三河後風土記』とを混同していないかということである。『国史大辞典』の同じ項目で新行は「刊本に『史籍集覽』『通俗日本全史』九〇十一、桑田忠親監修『改正三河後風土記』などがあるがすべて改正本である」と記している。つまり明治以降、『三河後風土記』が刊本として世に出たことはない。司馬が江戸期の原書を蔵していた可能性は無論ゼロではないが、両者を混同していたのではないかと思える。これは本源性、借用性の問題となるが、司馬が『三河後風土記』からの引用文とする、築山殿が滅敬を「常に閨の中にと

めおき給い、花鳥の色にも音にも飽かず睦み語らせ給うさまは、古の道鏡のためしにも引き出すべし」も『改正三河後風土記』のその部分と異同がない(5)。それに、『霸王の家』の六年ほど前に書かれた『関ヶ原』の「秀吉と家康」の章の引用史料名も『改正三河後風土記』となっている。

あるいはこれも作者の混同ではなく、ある資料集からの引用の際にそこに記載されていた史料名をそのまま記しただけのことであつたのかもしれない。また、『改正三河後風土記』の史料的価値は、その改編者成島司直の儒教的史観、徳川家賛美の姿勢に帰すものである。また、かれによって書き改められたこの書は『徳川実記』同様、他の原史料を引用した部分が数多くみられる。編年体の記述など捨てがたい面もあるが、原書『三河後風土記』そのものが編纂された時期が少し後代であり信頼性に欠けることと、後代の成島の加筆部分の右の性格から、その史料価値をかなり割り引いたものと考えなければならぬのである。司馬は、この『三河後風土記』『改正三河後風土記』から四つの逸話を引用している。これは『霸王の家』中、史料名を明記したものの中では最高の引用数である。史料的価値よりも、自身のいう「いかに三河といふこの国の草いきれとエネルギーを感じさせるところ」に文学的興味を感じたからだろう。

それ以外の調査可能であつた史料の来歴についても、以下列举してみる。

信長の逸話を引用した『備前老人物語』は、成立年代は近世初期とされるが、これも作者が不詳である。開書集の性質とあわせ、その価値を高く置けない。『校合雑記』は、逆に作者が小花和源五右衛門と判明しているが、成立年代が不詳である。江戸時代の諸将士の事跡、逸話を編集したものである。北条氏康の事跡を描くために引用した『小田原記』は別名『北條記』で、他にも別名で流布されたものが多少ある。小田原城の落城後、かなりの年月を経て遺臣によって記されたものとされている。

軍学者小幡勘兵衛景憲は、幕臣としての履歴もあり、その意味では、景憲の著作と考えられている『甲陽軍鑑』『中興源記』は、荒唐無稽なものともいえないが、さりとて軍学書特有の装飾性や、前著が武田家の重臣高坂弾正の名をかたっていることなどを考えあわせると実録ともいいがたい。『改正三河後風土記』同様、最も問題の多い依拠史料といえるだろう。

松平頼寛が作者とされる『大三川志』も家康一代のことを記した伝記である。家康の敗軍のことなども忌憚なく描写しており、その点優れているが、誤謬もかなりあるとされている。なお、この史料も成立年代については不明である。『藩翰譜』については、

新井白石の著作としてよく知られている。当時の甲府藩主徳川綱豊（後の六代將軍家宣）に元禄十五年呈上したもので、万石以上の三三七家の大名の始封、襲封および排除などを記述したもので、白石の歴史意識から叙述も公平なものとされている。司馬が作品中に記述した永井家の大名としての累進の考証もほとんどがこれに拠っているほどである。

戦記の『四戦記聞』は『武徳編年集成』の別冊といふべきもので、『武徳編年集成』そのものは私撰の徳川霸業史としてはもつともまとまったものとされている。だが、編者の木村高教の卒年も江戸中期であり、それゆえ『四戦記聞』も家康と同時代の原史料ではなく、後代の編纂ものである。木村の史料考証はかなり高度のものだが、それでも今日のレベルから見ればまだまだ不備が多いとされる。『柏崎物語』も、天明期の三橋成方の加筆の部分が多く、原型の柏崎三郎右衛門の直話がどれほどのものか、容易に判定しがたいとされている。これ以外の『前橋聞書』、文政十一年に竹尾次春によつて編纂された『幕府祚胤伝』、真如によつてまとめられ『紀侯言行録』他の別名でも知られる『紀君言行録』、小牧長久手の役に関する戦記を中心とした史料『小牧陣始末記』『長久手御陣覚書』『長久手之記』『山中（忠兵衛）氏覚書』などは写本の年代、写本の所在地などが判明しているものや、明治

以降刊本が出たものがあるが、今日改めて本文批判や研究が求められているものばかりである。さらに、小牧長久手の役の戦記等の史料が、参謀本部がまとめた『日本戦史』から引用したものであるのか、ということには既に述べた。最後に『家忠日記増補』についても言及すれば『家忠日記』の著者松平家忠の三男忠一の孫忠冬が『家忠日記』に基づき編述したもので、それだけに『家忠日記』に比べて誤謬の多いものとなっている。

以上、司馬遼太郎が『霸王の家』で引用した史料を、主に来歴批判の観点から論じてきた。調査対象は、作品に史料名をあげているものだけに限定した。それら以外にも、多くの史料に拠っていることは明らかだが、調査結果の精度については、それらに言及しなくてもさほどの差はないはずである。また、史料価値を調査したものについては、これらの史料の全文ないしは断片に眼を通したが、『伊賀者由緒』かと思われる『伊賀者由来記』『カリーオン神父のローマ法王への報告書』『故老談話』については本文に眼を通せず、史料価値の調査もできなかった。『天野記』かと思われる『天野逸話』や、『古老物語』『烈公聞書』『改正太平秘史』についても、来歴批判に基づく史料価値の調査ができなかった。今後の課題としたい。

さて、『徳川実記』に載せられた以外のものをも来歴を中心に

調査していえることは、司馬の史料に臨む態度は、その作品発表の時期に関わりなく、史料を批判するのではなく、人間的面白味をそれらに求めた文学的な態度であったのではないかということである。今日では当該主義にも批判がないわけではない。だが、それでも前述したような歴史家ならば敬遠する史料を、司馬は進んで作品に取り入れているのである。かれは、歴史人物に対する関心を充足させるために、文書、記録に拘泥せず、むしろ史料価値がさほど高くない逸話、編纂史料に重きを置いてきた。読者に歴史を感じさせるための「象徴」的な人物像を造型するための材料を掘り起こすことに意を用いてきたと思われるのである。つまり、事実偏重の歴史家としてではなく、あくまで歴史小説家として史料に臨んでいた。

また、私の史料調査は、司馬の戦国ものに限定したが、幕末ものに関しても、比較的文書を多用しているとはいえ、逸話史料の重視の傾向は変わらない。

かれの史料収集はなるほど作家としてのキャリアを積むに従いより広範なものになったであろう。また、歴史小説家としては、おそらく先人の誰よりも史料に眼を通したはずである。一つの作品をまとめるのにこれほど膨大な史料数にあたった作家は、司馬以前にはいなかったといつていい。これらの評価は、もはや揺る

ぎないものとなっているし、私もそれには同意する。ただし、それは社会科学としての精度を課題としたものではなかったようである。そして、そのことは司馬の後期の作品群も、やはり歴史書ではなく、小説としての評価をより求められていることを意味している。

### 三、家康の人物截断の史論家のものとの類似

司馬が『霸王の家』や『城塞』等で描いた徳川家康は、一筋縄では理解しがたい人物である。特にその前半生と晩年の人格の落差が、大きな謎であるからである。関ヶ原の役や大坂の陣以前のかれは、極めて律儀な武将として当時認知されていた。部下を、自身の気随な激情で処罰したりしない男としても知られていた。徳人といつてよい人物であったのである。ところが、旧主豊臣秀頼を焚殺するにおよび、奸人の評価を最も被る人物になり果ててしまった。この家康の人間劇の不思議さを無理なく解明した書物は、ほとんどないといつていい。徳川家康くらしいの歴史に巨大な足跡を遺してきた人物ともなれば、その生涯は幾たびも語り手を変えて論じられてきたにも関わらずである。だが、数少ないが解明を試みた著作もある。そして、そのうちの一つが、司馬の家康像の形成に深く関わっているのである。

家康に関する著作は、明治以降の史論、伝記の分野だけをみて、主なものとして村岡素一郎、山路愛山、徳富蘇峰、中村孝也らの諸作品を挙げるができる。司馬の『霸王の家』は、引用史料の膨大さだけを見てみると、史論に近いものがある。また、史論といえば、歴史学が本分としている事実関係の一つ一つの究明よりも、人物截断と、その人物と当時もしくは後世の社会との関連についての記述が豊富だが、これはそっくり司馬作品にもあてはまる特色なのである。それゆえ、家康の人物截断に関しても、司馬は同業の先人たちの小説よりも、史論家の作品を多く参考にしたふしがある。ついでにいえば、司馬の人物截断における史論の参照は家康に限ったことではない。たとえば、秀吉を指して「人たらし」とは、司馬の『新史太閤記』の重要な、骨子ともいうべき人物評なのだが、これは山路愛山がその著『徳川家康』で既に評していたところなのである。

そこで、司馬の家康に対する視点の源流も、既述した史論家、研究家の諸作品の中にかがえないだろうかという疑問も当然うまれてくるわけである。

村岡の『史疑徳川家康』（民友社、明治三十五年四月）は一種の奇談である。それゆえ、伝奇小説をものしていた頃ならしらず、この『霸王の家』執筆当時の司馬にとっては最も縁のない作品で

あったであろう。一方、山路の『徳川家康』と中村の『徳川家康公伝』（日光東照宮社務所、昭和四十年五月）は両作品とも史料によくあたっており、それに忠実に記述がなされている。山路のものは史料の本文批判に少し問題があるが、中村のものは、専門家だけに家康の文書等を随所に引用しており、最も実証的で詳細な伝記と評しうるものである。しかし、これらの作品は司馬の所謂「犯罪」的謀略の大坂の陣などに対する記述が、家康寄りか謀略部分を詳述しない書き込みになっている。ミクロの事実の究明を心がける中村の研究者としての立場や、かれの家康伝の出版の未裔であったことなどを考えると、それも無理のないところであったのだが。しかし、それだけに司馬が人物截断に関してはいこれらの作品を参考にしたとは思われない。だが、たとえば築山殿事件と其後の武田攻めの『霸王の家』の書き込みの順序が、山路愛山の『徳川家康』に似ていること、中村の右の作や他の著作である『家康の族葉』（講談社、昭和四十年七月）、『家康の臣僚 武將篇』（人物往来社、昭和四十三年六月）などにあげられたエピソードとの類似などから部分的にはこれらを参考にしたとは思われるのであるが。

その点、徳富蘇峰の『近世日本国民史』（民友社。家康の記述

がある第一巻と第十三巻は大正七年十二月と同十二年十二月刊)の中で描き出された家康の晩年は奸人そのものであり、徳富自身が歴史の必然からそれに追いやられていった家康を憐れんでいるほどである。司馬には、家康に憐憫をかける趣味はなかったようだが、家康の前半生の「善人稼業」ぶりと晩年の悪辣家ぶりを対比させてその為人を活写したところをみれば、家康に対する人物截断に関しては、徳富のそれを最も参考としたのではなからうか。

しかし、全体として徳富の方が、家康に対する評価がやや甘いようである。徳富の筆が、家康の学問好きや学術振興政策などにも好意的に及んでいるからである。一方司馬は、『城塞』の「鐘銘」の章で、「学問とは、なかなか世を治めるに都合のよいものだ」という言葉を家康に語らせ、あくまで政策上の問題としにべもない。司馬の家康における英雄史観の逆の視点は、徳富のものを参考にした形跡が濃厚とはいえず、それをさらに辛辣にしたものであるうことは注目しておいてよい。

そこで、両者の比較を厳密にするために、まず徳富蘇峰の『近世日本国民史・家康時代下巻』(民友社、大正十二年十二月)における、家康の人物截断をいくつか挙げてみる。

第一に、その律儀な武将といわれた前半生については、①「律儀正直である事と、あると思はせる事とは、其の効力に於いて殆

ど同一だ」②「彼は利を見て動き、勢を見て変じた。但だ其の行動が、自然の趨勢に順応し、何等の作意もなく、無理もなく、恰も水到渠成の姿にて、万事を了したために、世間では家康を以て、最も律儀にして信用あり、正直なる者と思はしめた」③「偽善と云へば偽善であるが、一生偽善で立て通す事は、尋常人の及ぶ所ではあるまい」などとしている。

続いてその器量についても、④「家康の政治的仕組を審査すれば、殆んど一として彼の創作のものはない。彼は独關的天才でなくして、巧妙なる模倣者だ。然も彼の模倣は、古人の丸呑でなく、全く自個の見識を以て、集めて大成したのだ。彼の及ぶ可からざる所以は実に此点に存する」とある。天下経営者としての能力についても、⑤「彼の目的は、天下第一でなく、徳川第一であった。国民第一でなく、將軍第一であった。然も徳川氏と將軍家とを、百代に維持するには、民心に契合せねばならぬことを熟知した。故に彼は吾家を維持する為めには、善政を以て方便とするの結論に到着した」とあり、「方便」という記述が注目し値する。ただしその絶えざる自己鍛錬については、⑥「然も彼は実に自から其の天性を鍛錬して一種の家康氣質を製造した。彼は天性の英雄と云はんよりも、自製の英雄だ。吾人が最も家康に多しとするのは此の自からを教育したる一事だ」と高く評価している。

一方司馬は『霸王の家』の「三河かたぎ」「三方ヶ原へ」の章において、家康の前半生の律儀さを「長いものに対するこの種の巻かれかたの態度が巧みで、そのことは巧みという技巧的なにおいてはいっさいなく、天性の律儀さから発露しているようにも他人にはみられ、しかもひとだけでなく自分でも自然に自分の律儀さを信じ、さらにひるがえっていえばかれの律儀は決して律儀ではなく自分の鋭鋒をかくすための処世的なものであったことをおもえば、これほどふしぎな人物もまず類がない」「かれのような弱小勢力としては、律儀さを外交方針にするのもっとも安全な道であった。（中略）かれの律儀を猫かぶりのうそで演技にすぎないと片づけるのは容易だが、それにしてもそのうそと演技を、五十年もつづけたというのは、どういうように理解すればいいのであるう」などと表現している。徳富の家康評の①②③とほぼ同一の認識といてよいのではないか。

家康の器量についても「清洲へ」の章で、「かれは不幸なほどに独創性薄くうまれついていた。つねに先人がやった事例を慎重に選択して模倣した」「家康はむしろ独創を激しくおそれるところがあった。独創的な案とは、多量の危険性を持ち、それを実行することは骰子を投ずるようなもので、いわば賭博であった。模倣ならば、すでにテスト済みの案であり、安全性は高い」とある。

これらも徳富の④の評に近い。

天下人としてのありようについても「その最期」の章で、「かれは死ぬぎりぎりまで徳川家の保全をのみ念頭においていたとしている。これも、徳富の⑤のものと同じだが、司馬は家康の政策を「善政」とは安易に認めていない。これは、この作品だけでなく、他の作品にも再三みえる司馬の考えである。『街道をゆく』『長州路』（昭和四十六年五月〜同年七月）でも、「変ったおっさんであった」と家康を突き放すように評した後「世界的にいえば航海商業時代が第二期の隆盛期に入っていたのに、徳川家一軒をまもるためには、世界史の潮流から日本を孤立せしめ、ことさらに農民の原理でしげりあげた。農民の嫉妬心を利用し、相互監視の制度をつくり、密告を奨励し、間諜網を張ったという点で、日本人の性格をそれ以前にくらべてずいぶん矮小化した」とその政策方針に極めて辛口の批判を加えている。

谷沢永一は、司馬全集第三十四巻の解説で、以上までの司馬の家康に対する人物截断を徳富のものを紹介することなく引用しているが、やはり両者の人物截断は対比を厳密にしておく必要があると思われる。

しかし、徳富との比較を免れる独自の人物截断も、『霸王の家』にはみうけられる。司馬は、以下のように「なまやかな天才」よ



りも「変な人間」であった家康の内実を解き明かしている。

家康は、羽柴秀吉のように、一世にむかつて華麗な大魔術を演出してやろうというような天分はまったくなく、その思考法はつねにきわめて素朴で、素朴であることに自分を限定しきつてしまふ冷厳さをもっていた。人間の思考は、本来幻想的なものである。人間は現実の中に生きながら、思考だけは幻想の霧の上につくりあげたがる生物であるとすれば、現実的思考だけで思考をつくりあげることと努めているこの家康という男は、そうであるがゆえに一種の超人なのかもしれない。妙な男であった。

『霸王の家』「甲信併呑」  
徳川家康というのは、虚空こくうにいる。／＼ということは、地上にいるなまの人間とはおもえないほど、この男は自分の存在を抽象的なものにしてしようとしていた。この妙な男は、そうありたいと努め、日常ほとんどそのことに半ば成功していた。この男のこの精神をあらわすのに適当な既成のことばが無さそうで、無私といえれば哲学的でありすぎるであろう。かれは俗流の人物で、とうてい無私という透明度の高いことばにはあてはまらない。／＼そのくせかれには自己が無さそうで、自己まで客体化され、監視され、運営されていた。運営しているのは、虚空にいる抽象的な徳川家康によってである、とし

か言うほかない。かれの性欲ですら、そういうものの監視下にあった。(中略)／＼家康にもむろん好悪はあった。しかしそれを生涯おさえたということはなまの人間にできることではない。この男は、どうやら自分を抽象化するという奇妙な訓練を自分に課していたか、それとも徳川家康という名をもつた虚空の抽象的存在が、この男の欲望と感情を管理しぬいてゆくという、そういうぐあいに自分の仕組みをつくりあげたか、どちらかであろう。

『霸王の家』「不覚人」  
つまり、家康とは他の戦国大名のたれよりも、君主は自家や家臣たちを保護するための一個の機関であることを自覚した存在であり、それによって家臣たちに「徳川の傘下さんかに入ることは、他のどの大名に仕えるよりも安堵感があった」と思わせ、それが他家に類をみない徳川家の結束力につながっていったのだと司馬は考えているのである。同じく「不覚人」の章にいうように、確かに他家の主君の多くは「家来や被官にとって」、「いつその既得権をとりあげられるか、あるいは時と場所によっては命もろとも召しあげられるかわからない」「虎狼こうろう」のような存在であることが多かった。それと全く逆の戦国大名としての歩み方をしてみせたことが、家康の「奇妙」な、いや主君としてすぐれたところなのである。

また、それを可能にしたのが、思考を「幻想の霧の上」に置かず、「現実的」なものだけに則して働かせる家康の一種「超人」的などころにあると分析している。自己抽象化というものも「奇妙」ぐらいにしか評しない司馬が、家康について英雄を讃歎するものに近い言葉で評価を下している数少ない箇所が、この超人的現実思考なのである。領内の商人から蒔絵が施された陣中用の便器を献上された際、「なんの効がある。糞が蒔絵をよるこぶというのか」といって即座に打ちこわさせた美術品に対する無関心ぶりや、小牧の役の前に、秀吉から懐柔のための位打ちをうけた時、それをほとんど無視したという逸話が、司馬のこの家康に対する人物截断を裏付けている。

無論、司馬はこういつた家康の人物截断を、右のような表現や逸話で提示してみせるだけではなく、その自己抽象化、自己客体化が家臣などに対していかになされていったかを詳述している。しかも、家康にとつて凄惨ともいえる場面場面においてである。ここで逸話に近いものを一例にあげれば、家臣団の大半が家康にそむいた三河一向一揆の事後処理を挙げることができる。家康は「自分にそむいて反乱した家臣たちを大量にひきとつてもとの知行のままにし、過去をいっさい問わなかつたという、ほとんど信じがたいことを平然とやつて」のけたのである。それ以外にも、

同盟者織田信長や家臣への家康の心配り、言葉の配慮などについて細やかな描写がこの作品にはみちている。しかも前章で分析したように、それら自己客体化の家康の言行の多くが、文書、記録ではなく、史料価値が高くない逸話史料に拠っているのである。司馬は自身の人物截断のあとづけを、そういった史料によつて、しかし綿密におこなつたというべきである。

ところで、文芸評論家はおろか、歴史家でも司馬作品中のこの『霸王の家』に注目している者は少ない。しかし、巨大な歴史人物を、あくまで人間の枠内にとらえ、その犀利な視点でとらえた人物像を、他の人物との関わりにおいて特に鮮やかに提示している点、この作品は司馬作品のみならず本邦の歴史小説の中でも希少な価値を持つものといえる。しかも、実在の家康の歴史における足跡を考えれば、司馬の逸話史料にも基づく人物截断は、徳富のものを参考にした形跡が濃厚とはいえ、徳富のもの以上に我々を首肯させる説得力を有している。前半生と晩年の家康の人格の落差をはじめとする数々の謎が、無理なく理解できるからである。家康の文書研究の第一人者である中村の諸作品でさえ、右のような謎解きという点では、司馬のものには及ばないように思える。特にその点において、『霸王の家』に対する評価が少な過ぎるが不思議なくらいである。

注① 司馬遼太郎講演「『坂の上の雲』秘話」（『週刊朝日』平

成八年十一月二十日号増刊『司馬遼太郎が語る日本』）。

② 谷沢永一「没後一年 司馬さんの書庫・蔵書を探検する」（『文芸春秋』平成九年三月号）。

③ 桑田忠親『徳川家康——その手紙と人間——』（人物往来社、昭和三十八年十一月）など。

④ 『国史大辞典』第十三卷（平成四年四月）新行紀一「三河物語」の項。

⑤ 谷口克広「太田牛一著『信長記』の信憑性について」（『日本歴史』三八九号）。

⑥ 桑田忠親監修『改正三河後風土記』（秋田書店・全三巻、昭和五十一年十月〜同五十二年二月）「解題」。なお、司馬が作品中に引用した『三河後風土記』本文との異同の調査にあたっては、この秋田書店版の本文を参照にした。

⑦ ここまでの史料の調査については吉川弘文館『国史大辞典』全十五巻全十七冊（昭和五十四年三月〜平成九年四月）、朝倉書店『国史文献解説』正統（遠藤元男、下村富士男編、昭和三十二年九月〜同四十年十一月）、岩波書店『国書総目録』全八巻（昭和三十八年十一月〜同四十七年二月）、東京堂出版『史籍解題辞典』下（近世編、竹内理三・滝沢武雄編、昭

和六十年九月）、統群書類従完成会『群書解題』第四巻（昭和三十五年十二月）、吉川弘文館『戦国大名論集十二・徳川氏の研究』（小和田哲男編、昭和五十八年十月）、同館『織田信長家臣人名辞典』（谷口克広著、平成七年一月）、和泉書院『戦国軍記事典 群雄割拠篇』（古典遺産の会編、平成九年二月）を、また、古文書、史料批判に関する部分では、伊木壽一著『日本古文書学・第三版』（雄山閣出版、平成二年三月）、今井登志喜著『歴史学研究法』（東京大学出版会、昭和二十八年四月）、『国史大辞典』第七巻「史料」の項（坂本太郎記）を参考にした。